

いずみ
泉

ひらく
啓

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 406 号
学位授与年月日	平成24年 3月27日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期 3 年の課程) 人間科学専攻
学位論文題目	ハーバーマスにおける秩序の未完性の理解 ——同時代史を背景とした考察——
論文審査委員	(主査) 教授 正村 俊之 教授 長谷川 公一 教授 座小田 豊 准教授 永井 彰 准教授 下 夷 美幸

論文内容の要旨

本稿はユルゲン・ハーバーマス(1929-)の理論、思想を、これまで本格的に検討されてこなかった小論(時事論、書評など)や初期著作に着目することで詳細に読解する試みである。ある理論家、思想家の言明を本格的に理解しようとする場合、理論的主著と考えられる著作より小論や初期著作を検討することは有効な研究戦略である。こうした著作には主著にない平明な言い回しが見られることが稀ではなく、思想的主題の析出が期待できる。

ハーバーマスは多くの著作および多くの読者を持つ著名人である。しかしこの事情は彼の著作の受容上、決して全て肯定的に働いたわけではない。高い知名度の分、彼についてはいささか単純化された人物像が流布してきたように思う。「戦後民主主義者」(＝アメリカン・デモクラシーの信奉者程度の意)、「再教育(＝占領政府による戦後の民主的教育プログラム)の子」という人物紹介や、カフェ、サロンでの市民のコミュニケーションの推奨者という紹介が彼については通例行われる。そして「公共圏」、「市民社会」、「コミュニケーション的行為」、「討議」、「熟議」といったコミュニケーション論的諸概念ばかりが重視されて、説明が行われる。人々の対等な立場でのコミュニケーション、そしてそこから形成される同意・了解が民主政治の条件であるという論点こそ彼の主題であるという程の説明とともに、「やや一本調子」とも揶揄されるような人物像が語られてきたように思う。ハーバーマス自身の少なからぬ自己演出も相まって、穏健・平和な人物像が強化されてしまったように思う。

コミュニケーション論を重視する思想家と一般に言われているが果たしてそうか。『コミュニケー

シヨンの行為の理論』(1981、以下『理論』)や『事実性と妥当性』(1992、以下『事実性』)といった一部の限られた理論的著作を除けば、彼の議論は全体的にはコミュニケーション論を軸に組み立てられてなどいない。『小政治論集 (kleine politische Schriften)』(現在のところ最新号の『ああヨーロッパ』(2008)まで11号が公刊されている)という著書名でまとめられている大量の時事論や小論を読めれば良い。コミュニケーション論的な発想がはっきり見られる著作など、全体の一割程度のものであろう。彼の時事論や小論の主張内容はまことに千差万別で、カメレオンのようにオポチュニスティックである。例えば、99年のNATO軍によるコソヴォ介入の正当化の際のように、同意形成を重視するはずのコミュニケーション論的な発想とは相容れないような独断的でパターンリスティックな主張が行われることも珍しくない。こうした点を考えれば、ハーバーマスの読者、研究者において空気のように当然視されてきた事柄に、自覚的に距離をとることが必要となっている。年齢80を数え矍鑠としているとはいえ、主要な仕事をひとまず提出しきったように見える現在、ハーバーマスの初期以来の思想的統一性について一度本格的に検討してみることが時宜にかなっているように思う。

以上の事情を鑑みて、本稿は「秩序の未完了」という発想、特に「未完了 (die Unvollendetheit, the unfinishedness)」という発想をハーバーマスの思想的主題と見なし、そこから彼の初期から現在に至るまでの諸著作の読解を試みている。ハーバーマスは近代が「未完のプロジェクト」であると言った。「解放」と「開放」を望むハーバーマスは、近代社会の「完成」＝「閉鎖」を嫌悪する。彼がコミュニケーション論を導入するのも、「秩序の未完了」、すなわち近代社会を未完の秩序として維持するという問題関心によるものである。このようにコミュニケーション論的な発想に対して「秩序の未完了」の発想を優先させて読解することで、ハーバーマスがわれわれの思っていた(ハーバーマスによって思い込まされてきた)以上の理論家であった、とりわけ穏健・平和的なパブリック・イメージとはかけ離れたラディカルな理論家であったことを本稿は明らかにしている。

本稿の中心は、中盤以降の第5、6、7章である。しかしハーバーマスの自己演出的な部分を極力無視している本稿のハーバーマス読解に対して、筆者によるある一面の恣意的な拡大解釈であるという、本稿読者からの予想しうる疑念が上がることは避けたかった。そのために第1章から第4章にかけて、50年代から70年代初頭に至るまでの初期ハーバーマスを厳密なテキスト・クリティークに従って説明している。

具体的にはそこでは次のようなことが述べられている。第1章「超動物としての人間、ポスト形而上学としての近代哲学、そして『決断』の思想——50年代ハーバーマスの思考法について」では、アクセル・ホネットが先駆的に行った50年代ハーバーマスにおけるハイデガーとゲーレンという二人の(保守的)哲学者からの影響というテーゼを、立証に堪える水準にまで高めることを試みている。ボン大学哲学科という保守的環境で学問的に出発した50年代のハーバーマスにとって、最も影響力を持った思想家とはハイデガーとゲーレンという保守的な人物であった。当時の彼は、ハイデガーとゲーレン双方の影響(より正確には独特の換骨奪胎的再構成)によって、人間が本能によるいかなる拘束性、確定性も喪失したなかで生きる未確定動物であること(動物でありながら一般動物の特徴を超え出ている点を本稿では「超動物」と表現することにした)、そして近代がやはりいかなる拘束性、確定性もないポスト形而上学の時代であることへの視点を当初から持っていた。一般に50年代初頭のハーバーマスに関しては「ハイデガー・エピゴーネン」という説明が行われる。そしてハイデガーのナチズム関与を知ったのを機に、マルクス主義者に「転向」したかのように言われてきた。しかし本稿ではハーバーマスの53年のハイデガー批判は、決してハイデガーの全面否定ではなく、ハイデガーの世界史像、特に近代像のみを問題視する限定的批判であったことを確認している。彼ははじめからハイデガーを近代肯定的哲学者として換骨奪胎的に読み解こうとしていた。その再構成内容は、神なき時代を生きる近代人には形而上学

への囚われを脱し、能動的に「決断」することが課せられることになったという（どこかサルトルをも思わせる）ものであった。続いてハーバーマスのゲーレン受容の様子を見ていく。ゲーレンには動物ならざる人間のみが持つ「空隙」、「未確定性」をめぐる議論があるが、ハーバーマスはこれに着目し、未確定動物である人間のみが「決断」できるという主張につなげていく。ハイデガー受容とゲーレン受容が共に世界史の未完性と前衛主義性を重視しているという点で、内容的に似通っていることは明らかである（そしてイデオロギー批判という政治的営みもそこには萌芽的に見出しうる）。自閉性を拒み未閉鎖性、未完性を重視するという態度が、すでにこの時期の著作には見られる。人間（近代人）が未確定性のなかで能動的に決断し続けることで、世界史の未完性を維持するという前衛主義的な発想が、当初の彼にすでに見られることを本章では説明している。

第2章「50年代ハーバーマスにおける閉鎖的秩序への批判—時事論、小論に見られる問題関心」では、同じ50年代の今度は時事論的な著作に、前章で確認した未完性を重視する発想がいかんにか反映しているかを扱っている。これらの小論のテーマは芸術論から政治論まで多岐に渡るが、未確定性（未確定な現代芸術、未確定な教育空間、未確定な核技術・・・）が能動性、決断、政治的決定を生み出すという点で同じ発想が反復されている。芸術論では、抽象的な芸術が鑑賞者を未確定性に置き去りにすることでもたらず、能動化された状態が論じられていた。労働社会、消費社会（54年）や大学改革（57年）を扱った現代社会論では、労働管理専門家、広告プランナー、工業デザイナー、社会学者等々のテクノクラートたちが経済的、資本主義的に統合された現代の秩序に対してもたらず人々が能動化された状態、動的秩序への打開が期待を込めて論じられていた。58年の反核運動論ではこうしたテクノクラートは主題化されていないが彼の反核運動支持は、それが核の時代の政治秩序に必要であるという理解から行われたものであって、やはりここでも発想は秩序論的、機能主義的であった。自閉的な秩序とは対極の無秩序ストレスの限界的な秩序を追及しているハーバーマスの姿がそこには確認できるのである。

第3章「閉鎖的秩序の思想家ゲーレンとその批判——精神分析学（60年代）、コミュニケーション論（70年代）受容の背景考察」ではハーバーマスが、50年代から70年代初頭にかけて、ゲーレンの「未確定動物」、「欠如動物」論をラディカルに再構成し、自らの理論的立場を確立していくプロセスを扱っている。初期ハーバーマスから絶えずライバル視されているゲーレンは典型的な閉鎖的秩序の思想家である。彼は人間を権威や制度によって守られた特殊動物と考えていたが、彼において近代社会とはこうした権威や制度の喪失による全面的な無秩序化という相から悲観的に診断されていた。この診断に対し、ハーバーマスは権威や制度の自明性の喪失こそ近代人が自律し続けるための必要条件であるという対抗的発想から数々の反論を行っている。そしてこの反論を精緻化する目的で、理論的基礎づけのため60年代には精神分析学の受容が、70年代初頭にはコミュニケーション論の受容が取り込まれることになる。ハーバーマスは精神分析学やコミュニケーション論にそれ自体として魅力を感じているのではない。そうではなく、いかにすれば未確定動物論をゲーレン流の閉鎖的秩序論の根拠づけのためではなく、よりラディカルな未完の秩序論に彫琢できるか、という対抗的動機の下で精神分析学、コミュニケーション論の受容が行われていることをここでは確認している。

ハーバーマスの弟子筋にあたるクラウス・オッフエは、かつてマルクス主義者、批判理論家の存在意義を保守的知識人の短絡的な言説の拒否にあると説明したことがある。保守派知識人が無秩序や社会の危機を危惧し、閉鎖的な秩序を性急にもたらそうとするのに対し、オッフエいわく、批判理論家の優位は社会システムに「構成上の欠陥」が内在していることを認めていることにあるという。危機とは秩序が不断に再構築される上でのシステム内在的な好機である。このシステムの構成的部分を国民の忠誠や伝統的権威の復権によって即座に否定する論者は、三流の時代診断家であり、「占い師」程度の人間で

ある。批判理論とは、秩序を波風の立たない静的な状態と誤解している保守的知識人＝「占い師」の言説に「(政治的にのみならず) 理論的にも対抗する」企図であると彼は言う。批判理論家の説く理論的諸概念は理論武装のための道具に過ぎないことを、われわれは見逃してはならないのである。

第4章「未完の法・政治秩序誕生の時代としての18、19世紀——C・シュミット批判を手がかりにした『公共性』(1962) 詳解」は、初期ハーバーマスの代表著である『公共性の構造転換』(1962) の考察を行った箇所である。ここでは本格的に政治的テーマに取り組んでいる著作においても、主題は未完の秩序であることを説明している。ハーバーマスによれば、近代の法治国家とは未完の秩序である。自由主義的・市民的法治国家とは私的自由を秩序の空隙として認め、私事性を承認することで公秩序を創出するというパラドキシカルなプロジェクトのことである。だが不安定ながらも秩序を生み出していくこの自由主義的・市民的法治国家の独特の秩序創出方法は、彼にしてみれば十分に同時代人には理解されていない。カール・シュミットやその弟子たちは様々な論理で、自由と秩序創出の循環関係に制約を加えようとする。こうした知的ライバルに向けて、ハーバーマスはこう反論するだろう。私的自由は(無秩序ではなく) 相互のコミュニケーションを生み出し、秩序の不断の修正を促進していくものである、そして私的自由の承認から誕生する前衛主義者による暴力的秩序破壊は実は近代的な秩序にメカニズム上織り込み済みなのである、と。

16、17世紀の絶対君主制を理想視し、威厳と高貴さを持ち合わせた主権者、代表者、「公人」によって秩序が安定的に維持されると考えるシュミットに対し、ハーバーマスが対抗的に持ち出すのは18、19世紀的秩序である。この新しい時代の公的な人間、「公衆」とは一私人として発言を行い、そこから「公論」を生み出すような「理性の公的使用」者であると。またやはりシュミットに対抗するように、「先取り」行為を暴力的、パターンリスティックに実行する前衛が18、19世紀的秩序においては重要な役割を果たすと説かれる。シュミットが16、17世紀を秩序的な時代、18世紀以降を無秩序に不断に晒された時代と見なすのに対し、ハーバーマスは16、17世紀を閉鎖的秩序の時代、18、19世紀を未完の秩序の時代として再解釈する。このような主張が打ち出された『公共性』の刊行によって、ハーバーマスにおいて近代的秩序の未完性に関する基本的な思考がひとまず完成する。

本稿の論の中心は第5章以下であるが、第5章「至上目的としての未完性——『理論』(1981)、『事実性』(1992) の主題について」は、『理論』と『事実性』というハーバーマスの二つの理論的大著を筆者なりに「秩序の未完性」という視点から読解した箇所である。

『理論』と同時期の80年代に執筆された「近代——未完のプロジェクト」(1980) や『近代の哲学的ディスクルス』(1985) では、近代が本来結局も目的もなく方向を自己修正しつつ進行していく未完の過程であることが論じられていた。このような前近代＝閉鎖性、近代＝未完性のイメージは『理論』でも示され、「生活世界」と「コミュニケーション的行為」という二つの重要概念を用いて基礎づけられていた。伝承された意味を再投企することで再生産される「生活世界」はオートマティックかつシステムティックに進行する歴史の目的論を食い止める存在である。また「コミュニケーション的行為」は目的合理的行為が従っている目的概念を間主体的な再審にかけ続ける行為である。「コミュニケーション的行為」は間主体的調整によって目的の絶対化、硬化を防ぐ行為として『理論』において重視されている。複数人の中でのコミュニケーションでは絶えず否定と問いかけが行われることで、不断の修正のダイナミズムが生み出されるというのである。目的論の否定は近代の至上目的(テロス) である。このようなパラドキシカルかつ限界的な目的論を彼は「コミュニケーション的行為」概念の導入によって『理論』で基礎づけたのである。

コミュニケーション論による未完の秩序の理論的基礎づけは、92年の法・政治理論の著『事実性』に

において一層ラディカルなテーゼとともに実行されている。『事実性』においてハーバーマスは自身と基本的に近い立場であるアメリカの「市民的共和主義 (civic republicanism)」との差別化を図ることで、自らのコミュニケーションおよび市民社会概念が限界的な概念であることを示そうとする。東欧革命以降、市民社会概念や市民の政治的コミュニケーションが世界的に社会学者から注目される時代にあつて、ハーバーマスはそれらについてややアイロニカルな説明を行う。彼は市民社会の役割を限定すべきであるという。市民社会は政治システムを支配するのではなく、守りに徹すれば徹するほど固有の強みを発揮することができる。市民社会の役割は責任ある熟議や政治への積極的参加などではなく、むしろ無責任、匿名的、不定形なコミュニケーションを絶やさないことで法治国家の未完性を維持することにあるという。「市民的共和主義者」が熟議し政治参加する市民を民主政治の基礎として重視し過ぎるあまり、パターンリスティックな市民教化論に陥っていると考える自らをアナキズムの側に位置づけさえする。ハーバーマスは、こうして理論的著作において無秩序スレスレの限界的な状態を概念的にも基礎づけていくのである。

本稿のクライマックスといえるのが、第6章「前衛実践の自律性と法治国家におけるその例外性——初期・中期時事論 (1960年代初頭-1983) の主題について」および第7章「ナショナル・アイデンティティの未完性、国際秩序の未完性——後期時事論 (1986-) の主題について」である。前者は初期・中期の時事論、後者は後期の時事論を軸に考察したものだが、理論的著作におけるコミュニケーション論の陰でこれまで不当に軽視されてきた、未知なるものの歓待や、現行秩序の暴力的破壊といった議論がいかにハーバーマスの秩序思想において重要であるかを説明している。

第6章で考察している前衛実践に関する議論は、一見『理論』や『事実性』のコミュニケーション論と関連が薄く感じられるものである。しかし両者は秩序の未完性という発想において結びついている。学生運動のアクションイズムは、彼にとって自閉的秩序の無自覚な加担行為であると見なされていた。それに代わってハーバーマスが提唱したのは、最小的、自律的、例外的であるような実践である。こうした実践のみが秩序を自閉化せず、未完のものとして維持しうるというのである。60年代の学生運動に対してハーバーマスは「最小限」の実践の意義を説いて回っていた。唯一そのような実践が体制の全体主義的強制に抵抗しうるというのが彼の確信であった。前衛実践とは彼にとって他領域から分化した自律的な領域であつて、他領域と無媒介化しないことで固有の力を発揮しうる。83年の反核運動論では、正反対の秩序思想の持ち主であるシュミットから例外性の発想を受け取り、真の抗議運動、真の市民的不服従が現行法の合法・不法観念の外部に立つ存在と見なされ、未完のプロジェクトとしての法治国家に不可欠な例外的構成要素として概念化されたのだった。ハーバーマスにとってこうした自己限定的な行為こそ秩序の自閉化を打開しうる最もラディカルな前衛実践と見なされる。このようにコミュニケーション論の不在にも関わらず、彼の時事論の主題も秩序の未完性なのである。

60年代から80年代前半にかけてのハーバーマスは、学生運動⇒新しい社会運動⇒緑の党という西ドイツの「68年世代」の営みに同伴するように、抗議運動への関心を一貫して保持していた。しかし時代の空気に敏感な彼は、その後次第に運動への関心を失ってしまったように見える。83年の反核運動論で彼は西ドイツの抗議運動がようやく成熟したものとなったと肯定的な評価を行っていたが、抗議運動が成熟し、緑の党が軌道に乗ったちょうどその頃、彼は抗議運動を論じることから身を引きはじめる。代わって新たな主題となったのは、ナショナル・アイデンティティ、国連あるいはEUといった国際秩序に関する問題である。法治国家という一国の秩序から国際秩序へと問題関心が移っていく。この80年代後半以降の時事論について検討しているのが、第7章である。

まず第7章前半では歴史家論争とホロコースト記念碑論争という歴史分野における80年代と90年代の

二大論争時のハーバーマスの発言を手がかりに、彼が未完性という観点をナショナル・アイデンティティ論にまで適用するようになった様子を確認している。ハーバーマスにとってアウシュヴィッツ、ホロコーストとは純粋な「断絶」、歴史的過程の「空隙」として重視されている。反省弁明、謝罪といったことは彼にとってあえて言えば二次的な問題であって、この絶対的断絶への注視によって「未完のプロジェクト」が首尾よく進行していくことが重視される。ドイツ人の自閉的、ナルシスティック、悪循環的なナショナル・アイデンティティに代わって非連続的な過程が出現することが期待されている。

続いて7章後半では90年代以降、冷戦体制の崩壊とともに主題化されるようになった国際秩序論も未完性の発想を軸として展開されていることを説明する。ハーバーマスが90年代以降国連を中心とする国際秩序、世界警察秩序を提唱するのは、そのような秩序のみが「アナーキー」な性格をもった「グローバル・テロリズム」の到来に対応しうる（デリダの言葉を用いれば、この未知なるものの到来に「ウィ」を唱えうる）からである。だが『公共性』における「非公式的」と称されたカント読解に見られたように、ハーバーマスはこうした彼にとっての世界市民的状态がオートマティックに出現するものとは考えない。暴力性とパターンリズムを自覚する者による未完の秩序への実践的投企が欠かせない。同意形成を重視するコミュニケーション論的発想とは相容れない彼のNATOのコソヴォ介入擁護論、EUの深化をめぐる中核ヨーロッパ論とは、この前衛主義的論理の現れに他ならない。彼の議論で常に問われているのが秩序の未完性であり、それを生み出す最小的、例外的な前衛実践であることが、以上の叙述を通して論証されたものと考えられる。

以上のようにハーバーマスの議論は、秩序の自閉性を拒否し、未完性を追求するという発想を巡っている。確かに使用される語彙は、時代ごと著作ごと、また対峙している相手次第で変遷が激しい。ハーバーマス自身のいささか自己演出的な振る舞いも相まって、これまでハーバーマス読者、研究者は転回や転向、あるいは諸言明間の矛盾を口々に表現してきたものである。50年代におけるハイデガー・エビゴネンからの「脱却」、70年代の「コミュニケーション論的転回」、80年代の「法理論的転回」、あるいは90年代のコソヴォ介入擁護時の「リアリスト化」などのように。だが改めて問うてみたい。彼の主張に大規模な変化など存在したのか。ハイデガーを好意をもって論じていた（もっとも換骨奪胎的に、だが）最初期の頃から現在に至るまで何一つ肝心な主張は変わっていないのではないのか。20代の頃、近代をポスト形而上学的時代として、人間をポスト動物として語っていた時分と、80年の講演で近代を「未完のプロジェクト」と名づけた時分との間に、さしたる思考上の差異があるわけではない。『公共性』でカントの歴史哲学の「非公式的」、前衛論的な読解法を提示していた時分と、90年代以降コソヴォ介入擁護論やヨーロッパ統合論において先進諸国優先的な議論を説いている時分との間に、さしたる差異があるわけでもない。表層上は様々な事柄が語られたかもしれない。しかし常にハーバーマスの問題関心は、「秩序の未完性」をいかに維持するかという主題をめぐっていたことが理解されたように思う。以上の細かな諸事実の地道な積み上げによって、コミュニケーション論中心でかつ穏健・平和的な従来の読解とは別様のハーバーマス読解に成功したと本稿は考える。

ハーバーマスという人物はヒューマニズム、戦後民主主義、近代啓蒙、進歩主義、前衛主義あるいは合意を目指すコミュニケーションの信奉者である。しかし自閉的秩序の強力さを自覚しているハーバーマスにとって、これらの諸理念の素朴、短絡的な絶対視ほど倦むべきものはないといってよい。しばしば指摘されるごとく、ヒューマニズムにせよ戦後民主主義にせよ合意にせよ、決して暴力性と無縁ではない。彼は理性の暴力性を理解している。むしろその暴力性を自覚する反省的なヒューマニズム、戦後民主主義、近代啓蒙等々こそ、ハーバーマスの立場、視座と見なすべきである。「ポストモダン」な知性が栄えた後、今や翻って求められているのはこうした新しい近代啓蒙の立場ではないだろうか。

今後のハーバーマス研究は、こうしたラディカルな読解から進められていくべきであろう。

論文審査結果の要旨

ハーバーマスが近代を「未完のプロジェクト」として規定したことは有名であるが、本論文は、これまで注目されてこなかった初期の論文や時事評論をも視野に入れながら、「秩序の未完性」という視点から初期から後期に至るハーバーマスの理論を読み解いたものである。序章・終章を含む9つの章からなる。

序章では、本論文の課題と視座が述べられる。第1章では、1950年代のハーバーマスの論文が取りあげられ、ハーバーマスがハイデッガーとゲーレンの哲学的人間学の換骨奪胎をはかることによって、人間を「未確定動物」、近代を確定性のない「ポスト形而上学の時代」として捉える視点を初期の段階からもっていたことが明らかにされる。第2章では、そのような人間観、近代観が50年代のハーバーマスの時事評論的な著作のなかに反映されていることを示すとともに、「未完の秩序」という発想がハーバーマスの思想の中核にあることが示唆される。第3章では、精神分析学やコミュニケーション論を受容した60・70年代の著作をつうじてハーバーマスがゲーレン理論を批判しながら自らの立場を明確にしていくプロセスが描かれる。第4章では、60年代の代表作である『公共性の構造転換』が取りあげられ、シュミットの公共性理解への批判をつうじて、ハーバーマスが公衆の「未閉鎖性」と前衛実践の「例外性」を積極的に評価していたことが示される。第5章では、80年代と90年代の代表作である『コミュニケーション的行為の理論』と『事実性と妥当性』が取りあげられ、いずれの著作も未完で限界的な秩序を基礎づけるための理論であることが述べられる。第6章では、60年代から80年代にかけて書かれた時事評論を手掛かりにして、ハーバーマスが真の抗議運動を「未完のプロジェクト」としての近代の法治国家に不可欠な構成要素として捉えていたことが指摘される。第7章では、そのような視点からコソヴォ介入やヨーロッパ秩序をめぐるハーバーマスの立場が説明される。そして最終章では、全体の総括と展望が述べられる。

以上のように、本論文は、「秩序の未完性」という視点がハーバーマスのコミュニケーション行為理論や社会理論に貫かれていることを示すことによって穏健な民主主義者という従来のハーバーマス像に修正を迫ったものである。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。